

アトモロック

2001年3月卒業式に出席するためアトモロックを初めて訪ね、一泊しました。今回は1月4日から10日まで一週間滞在させて頂きました。

アトモロック山を背景に、学校は前と同じに厳かな雰囲気を漂わせていました。5日月曜日、休み明けの学期始め、子ども達が学校へ戻ってきました。校庭の手入れをする刃物を手に持って登校してきます。刃渡り30センチ以上ある刃物を1年生でも持ってきているのには驚きました。しかしこの後さらに驚いたのは、学校の先生の2歳の男の子が、皆が刃物で校庭を手入れしているのを見て、自分も真似して刃物を持って、雑草を刈っていたのを見た時でした。その子の母親である先生はそばにいますが、「危ないから」と言って、やめさせることはありません。子どもは真似をする、という当然の行動を認めています。日本でのように「危ないから」と、危険と思われるものは、取り上げる、させないのと、なんという違いでしょうか。それぞれ持ってきた刃物は、授業中は机の上や下に置いてあったりします。はっきりいうと「刃物がごろごろしている」という印象で、抵抗がありましたが、怪我をしたという話はききませんでした。時には鉛筆を削るのに、使ったりもしていました。

子ども達は分担して、教室・庭掃除、花壇の手入れ、植木鉢の水やりなどを行い、鐘を合図に校庭の中央に皆集まり、国旗掲揚と国家斉唱がありました。先生が少し話した後、各教室に入り、授業が始まりました。2学年ずつの複式授業です。教室の床は、前は土のままだったのですが、昨年4月ディダン先生がバイヤニンフィリピン人賞を受賞し、その賞金を寄付して、板張りの床になりました。

小学1年に17歳、2年に13歳、6年に20歳の生徒がいました。17歳で1年生のジュンリは、お金がないけど学びたいとエルナ先生に訴え、エルナ先生が家庭での仕事を与えて、学校で学べるようになりました。自らも苦学生だったエルナ先生は、経済的に楽とは言えないけれど、勉強したいというジュンリの意志を尊重し、できる範囲で援助したいとの事でした。20分の休み時間でも薪を割ったり、豚のえさを準備したり、ジュンリにとって「休み」はありません。20歳で6年生のジェームスは、農家の手伝いをして働き、学校で必要な経費を自分で払っているとの事。学齢に達しても学校へ行けない、授業料が払えなくて退学せざるを得ないというのは、フィリピンの貧困の負の面ですが、いくつになっても勉強したければ学校へ行ける、周りも受け入れるという、フィリピンの多様性を示す良い面を見ることができました。

授業は、一般的に、教師が教科書に書いてあるのを黒板に書き、それを生徒が写す、それに関して質問する、という形式でした。質問には、熱心に手を挙げ（日本のように真上に挙げるのではなく、上前方ですが）、当たりたくて「先生、先生」と叫んでいました。答えるのにノートをそのまま読んで良いのには驚きました。それなら皆答えられると思うのですが、やはり積極的に答えるのは決まった生徒です。ノートもとらない、手も挙げないと、ただ教室に座っているだけの生徒が各クラス数名はいました。2学年一緒に40名程のクラスですから、先生の指導は限られてしまいます。せめて1年生には助手の先生でもいれぼと思ってしまいますが、まだまだ質より量の時なのでしょう。

学校から歩いて15分程のキシルダタルと言う集落へ、母親クラブの養豚事業の様子を見に昼間行ってきました。何事かと興味深く集まってくる子ども達の中には、明らかに学校へ行っているべき年齢の子ども達がまじっていました。まだまだ学校へ行けない子がたくさんいる事実を知るのには辛いことでした。



校庭の草取りをするジュンリと同級生

午前中3時間のうち、休み時間は1回20分だけで、科目が変わるごとに休み時間があるわけでないので、科目の変わり目には、動作をつける歌を歌って、身体を動かしていました。「幸せなら手をたたこう」のフィリピン語版があることを知りました。

先住民族の子にとって、言葉のハンディもあり、都会の子と同列になるのは大変難しいと感じましたが、教育とは時間のかかること。早急な結果を求めず、時間をかけて見守りたいと強く感じました。